ロシア語の不定人称文の情報構造について[1]

水野 庄吾（京都大学大学院）
mizuno.shogo.46m@st.kyoto-u.ac.jp
松本 大貴（京都大学大学院・日本学術振興会）
matsumoto.daiki.24x@st.kyoto-u.ac.jp

<Abstract>
This study examines one particular type of the so-called indefinite person construction in Russian. One striking characteristic of the type of this construction that we examine is that the plural inflection can be used even if the denotatum of a noun phrase is singular. Refuting the well-known definition of this construction as defocusing of agent, we propose that this construction is a result of these three information structural properties: (1) deletion of the topic subject, (2) topicalization of the remnant except the verb, and (3) focusing of the verb.

【キーワード】：ロシア語，不定人称文，情報構造，動詞の焦点化

1. はじめに

本稿では，ロシア語の不定人称文について，先行研究では，ほとんど着目されてこなかった情報構造について考察する．その際，「話者の主語への強調の低下」や「動作主の脱焦点化」とされてきた不定人称文の機能を「話題主語の脱落」と捉え直し，「動詞の焦点化」が，不定人称文の大きな特徴の 1 つであると主張する．

本稿の構成は以下の通りである．まず次節でロシア語の不定人称文が持つ 3 つの大きな特徴を確認する．続いて 3 節では，同構文についての先行研究をさらい，情報構造の観点からの考察の欠如を指摘する．それを踏まえ，4 節では，情報構造の観点から，不定人称文の機能として，「話題主語の脱落」，「主語以外の項の話題化」，そして，それらに伴う「動詞の焦点化」の 3 つがあることを確認する．最後に，本分析がもたらす経験的な予測などについて，簡単に触れる．なお本稿で用いる例文はナショナルコーパスから引用したものと，筆者が作成し，複数のネイティブスピーカーにチェックを受けたものである．

2. ロシア語の不定人称文

[1] 本研究は、一部ＪＳＰＳ科研費（課題番号: 20J20039）の助成を受けている。

ロシア語には，不定人称文と呼ばれる文が存在する．不定人称文には，以下のような 3 つの特徴がある．

①ロシア語では，SVO 語順が基本語順であると考えられる．しかし，不定人称文では，主語を不特定人物にし，脱落させることで，意味的には受身に近い文を作る（そのため，先行研究では，不定人称文は受動文の「機能的シノニム」とされている． Xrakovskij 2004: 513−514 ; 村越 2018: 51 を参照）．またその際，多くの場合は，目的語など，顕在的な項要素を動詞に先行させる．(1)を見られたい．

(1) zdec′ nepodaleku očerednuju vysotku **stroili** ?
here near next skyscraper-ACC build-PST.3PL.
‘Was the skyscraper being built near here?’

②また，不定人称文では，発話の文脈において，動詞の外項が明らかに単数である場合でも，屈折は必ず 3 人称複数形が用いられる．具体的には，以下の(2)のような文である．

(2) Mnje **podarili** knigu.
I-DAT give-PST.3PL book-ACC
‘I was given a book’

例えば，プーチンという人物がスターリンという友人から本をもらったという文脈を考える．この談話状況において，主語が誰であるのか伝える必要のないとき，あるいは伝えたくないとき（憚られるとき）に，(2)の文は，*podarili* が 3 人称複数形であるにも関わらず，適格となる．不定人称文の形成を妨げるのは，主語が 1 人称単数の場合と，主語が人間以外の場合のみである(Xrakovskij 2004 : 514).

③さらに，①で指摘した動詞に先行する要素の多くは，直接補語で，この直接補語の担う格は対格となる．具体的には，以下のような文である．

(3) Knigu **chitali.**
book-ACC read-PST.3PL
‘The book was read.’

つまり，元々対格補語であったものが主格主語になる受動文とは違い，不定人称文では，動詞に先行する補語は明らかに動詞の直接補語のまま移動していると言える（故に，受動文の“機能的”シノニムなのである）．また，(3)の英訳が示すように，不定人称文における文頭の目的語は定の読みのみを許す．

以上，ロシア語の不定人称文の特性を概観した．次節では，同構文が先行研究でどのように分析されてきたかを確認する．なお，②の事実については，最終節で簡単に推測を述べる．

3. 不定人称文の先行研究

3-1. Xrakovskij (1981, 2004)

Xrakovskij (1981: 6)は，受動文を「動作主＝主語の関係が，能動文から受身文に変換されるときにくずれ，動作主＝客体として表されるか全く表示されないもの」と定義した上で，受動文と不定人称文について，この定義の上では，差異化が図れないとしている．また， Xrakovskij (2004)は，能動文と受動文では，話者の強調に差があることを指摘し，不定人称文にも受動文と同じような話者の主語への強調の低下の効果があることから受動文と不定人称文には相関性があるとしている．

3-2. Plungjan (2011)

Plungjan (2011)は，不定人称文について，Xrakovskij (2004)同様，話者の強調点という観点から説明し，主語への話者の強調が低下することによって，脱落することに加え，他の参与者が文のテーマになると述べているが，ここでのテーマについては，具体的な定義は述べられていない(Plungjan 2011 : 193-194).

3-3. 村越 (2018)

同様の考えは, 村越（2018）にも見られる. 村越は, 日本語の受身文との対照において, Shibatani (1985)で提案された受動文とその関連構文を統一的に捉える概念である「動作主の脱焦点化」を用いて, 不定人称文を説明している. Shibatani (1985)で述べられている「動作主の脱焦点化」とは，動作主である主語が担うはずの焦点を，別の要素が担うことである．村越 (2018)によれば，不定人称文では，主語の指示対象は不特定で省略されているので脱焦点化の効果が生じ，目的語が話題化され，文頭に置かれることで受身的な意味で解釈されるという(村越 2018 : 51−52).

3-4. 先行研究まとめ

以上から，これらの先行研究ではロシア語の不定人称文が「話者の主語への強調の低下」や「動作主の脱焦点化」と説明されていることがわかる．これらは，用語の相違はさておき，概して同じことを述べていると考えられるが，まず，どれも定義がかなり曖昧であり，記述の道具として適切とは言えない．このことから，これらの曖昧な定義に通底するような概念が，不定人称文の特徴の説明に必要であることがわかる．

定義の曖昧性だけが問題ではない．というのも，ロシア語の不定人称文で脱落する主語の意味役割は，何も「動作主」だけではないのである．この点は，Shibatani (1985: 833)自身が「動作主」という用語の中に，経験者や所有者を含めていることからも明らかである．実際，第２節でも見たように，ロシア語の不定人称文は，基本的に，脱落する主語が人物でさえあれば，その意味役割にかかわらず成立する．(4), (5)を見られたい．

(4) Izvinite, Menja **ždut.**
sorry I-ACC wait-PRS.3PL
'Sorry, I have kept you waiting.' (Lit. 'Sorry, I am waited.')

(5) U Aršavina est′ imja, kotoroe
at Arshavin-GEN be name-NOM which-REL
znajut v Evrope
know-PRS.3PL in Europe
'Arshavin has the name which is known in Europe.' (Lit. 'The name which is known in Europe is at Arshavin')

(4)で脱落する主語の意味役割は，主題もしくは動作主，(5)では，経験者である．このことから，ロシア語の不定人称文については，脱落する主語の意味役割を限定するのは最適ではないと言える．

また，(4), (5)はそれぞれ，受動文の成立を許さない *znat′* 「知っている」や *ždat′* 「待つ」という動詞であっても，不定人称文としては使用可能であることを示 している．この点からも，不定人称文と受動文の異なる文であることがわかる．加えて，受動文と不定人称文が異なる構文であるということは，第２節の②からも明らかであるが，この点について先行研究では，事実の指摘にとどまり，具体的な説明は与えられていない．

さて，先行研究の問題を概観したが，先行研究で共通して用いられる，「強調」や「（脱）焦点化」という曖昧な用語は何を意味するだろうか．「強調」とは，我々が読み解いた限りでは話者が当該の文が表現することの対象としているもの」と考えられる．また，「焦点」という Shibatani の用語は，「文によって述定される対象」と読める．興味深いことに，どちらも情報構造で言うところの「話題」である．話題とは，話者が，聴者がすでに知っていると想定する情報のことである（詳しくは，Erteschik-Shir 2007 や Lambrecht 1994 を参照されたい）．話題は，「焦点」と対をなす概念である．焦点とは，話題とは逆に，話者が，聴者がまだ知らないと想定するような情報のことである．例えば，「太郎は何を買ったの？」と聴者が質問してきた場合，話者は，太郎はすでに聴者に知られている話題だと考え，太郎が買ったものについては，知らないから質問をしているのだと考え，その情報を焦点とみなす．

先行研究の用語が話題にまとめられるというこの事実は，ロシア語の不定人称文の特徴を説明する際に重要になるのは情報構造的な概念であることを示している．ロシア語の受身文について，情報構造の観点から触れている先行研究としては Comrie (1981: 75-76)が挙げられるが，そこでは，不定人称文は受動文の意味的類似文として紹介されているのみであり，具体的考察は成されていない．そこで本稿では，ロシア語の不定人称文について，情報構造の観点から詳細に考察する．

では，具体的に不定人称文は，いかなる情報構造を持っているのであろうか．以下では，「動詞の焦点化」が不定人称文の情報構造的特徴であるという仮説を提案する．

4. 不定人称文の情報構造

4-1. かき混ぜによる動詞の焦点化

不定人称文は，一般に，主語以外の要素（ほとんどが目的語）が動詞に先行する．このような，主語以外の要素の文頭への移動は，生成文法の文献では「かき混ぜ」と呼ばれる，よく知られた現象である．また，かき混ぜを受ける要素は，典型的には話題要素であるということもよく知られている（詳しくは，Erteschik-Shir 2007 を参照されたい）．以下，(1)を再掲する．

(1)	zdec′	nepodaleku	očerednuju	vysotku	**stroili** ?
	here	near	next	skyscraper-ACC	build-PST.3PL.

‘Was the skyscraper being built near here?’

これらのことを勘案すると，ロシア語の不定人称文において文頭に生起する非主語要素は，かき混ぜを受けた「話題」であると言えよう．実際，かき混ぜられた要素は，英語のグロスからもわかるように，定（definite）の名詞である．定の名詞は，すでに話者間でその存在についての知識を共有された要素であり，話題である．このことから，以上のような想定は妥当であると考える．

この分析が正しいとすると，かき混ぜを適用した結果，元位置に残留する動詞は，文末位置となり，文末焦点の原則 (Comrie 1981: 72)に従い，焦点化を受けることになる．なお，文末焦点の規則とは，概略，文中でもっとも“後ろ”に生起する要素が無標の焦点を担うという規則である．これにより，(1)では *stroili* が焦点を担うと予測されるが，これは事実正しいことがわかる．

さらに動詞の焦点化を支持する経験的なデータとして，非対格動詞からは不定人称文を作ることできないということが想定される．非対格動詞は，Burzio (1981)が述べるように，元々動詞の目的語であったものが，格を付与されるために主語位置に移動するような構文的特徴を持つ．そしてよく知られていように（e.g., Lambrecht 1994: Ch.1），非対格動詞は主語が焦点を担う．この事実は，本稿での不定人称文についての想定である「話題主語の脱落」とは相容れず，非対格動詞からは不定人称文が作れないということが想定されるが，これは事実正しい．(6), (7)を見られたい．

(6)	*Zdes′	**upali**	bez	soznanija
	here	fall-PST.3PL	without	consciousness

‘Here they lost consciousness and fell down.’

(7)	*V	gostinicu	**prišli**.
	to	hotel	arrive-PST.3PL

‘They arrived at a hotel.’

主語位置に生起する要素が無標の焦点となるような非対格動詞から不定人称文を生成できないというこの事実は，本稿で提案する「動詞の焦点化」という不定人称文の特徴から，自然に説明できる．よって，この事実は，本稿の仮説を支持する経験的な証拠と言える．

また「動詞の焦点化」を支持する例文として，以下の (8)を見られたい．

(8)	Naoborot,	ego	ochen′	daže	**jubjat**!
	contrary	he-ACC	very	even	like-PRS.3PL

‘On the contrary he is even very loved.’

(8)において、*daže* に修飾される語 *jubjat* は，焦点を担う．この文は，ご覧の通り不定人称となっていることから，動詞の焦点化が不定人称文の機能であるという本稿の主張を支持すると思われる．

さらに，話題化を受ける要素は目的語でなくても構わない．以下の (9)を見られたい．

(9)	Etot	dom	pustoj?	Net,	pohožje,	zdes′	**živut.**
	this	house	empty	no	likely	here	live-PRS.3PL

‘Is this house empty? No, it is likely that someone lives here.’

(9)での *živut*「暮らす」は，いわゆる自動詞で，そもそも直接目的語を要求しない．そのため，当然，受動文で用いることはできないが，不定人称文は，動詞が焦点になりさえすれば成立するため，(9)では，場所を表す *zdes′*「ここ」が話題化し，動詞が焦点化しているため，不定人称文として成立している．

以上，先行研究の問題点を指摘した上で，本稿では「ロシア語の不定人称文は，動詞の焦点化という情報構造的特徴を持つ」という仮説を提案し，その仮説の妥当性を検証した．

5. 結語

本稿では，ロシア語の不定人称文について，先行研究を捉え直し，情報構造の観点から考察した．不定人称文では，「話題主語の脱落」，「主語以外の要素の話題化」が起こり，その帰結として「動詞の焦点化」が起こると主張し，非対格動詞の例と(8), (9)からこの仮説が支持されることを確認した．最後に，第 2 節の②の事実について，簡単に推測を立ててみる．ここで問題にしていたのは，言語外事実において，主語が明らかに単数である場合でも，話し手が主語を伝える必要がないと考えている場合，もしくは伝えたくない場合には，必ず動詞の 3 人称複数形を要求する不定人称文を用いるということである．以下に，(2)を再掲し，これを確認する．

(2)	Mnje	**podarili**	knigu.
	I-DAT	give-PST.3PL	book-ACC

‘I was given a book’

(2)では，話題主語が脱落し，Mnje「私に」が文頭に移動し，話題化を受けることで動詞が 3 人称複数形となっている不定人称文である．この文は，たとえ，プーチンという人物がレーニンという友人から本をもらったという場面であっても，上述のように，主語を伝える必要のない場合，あるいは伝えたくない場合に，適格となる．話題は，話者が，聴者がすでに認知的にアクセスできると想定する情報と定義されるわけだが，さらにそのタイプは細分化される．典型的な話題要素は代名詞などであるが，総称文の主語などがまさにそうであるように，「人間」や「生物」のような，抽象的な上位概念も常にアクセス可能な話題要素と言える．これを勘案すると，不定人称文で脱落する主語は抽象的な上位概念としての「人間」的な解釈受けるのではなかろうか．事実，不定人称文は，主語が誰であるのか伝える必要のないとき，あるいは伝えたくないとき（憚られるとき）に用いられる．

不定人称文において，話題である主語は「人間」という情報のみを残し，脱落するために，主語と動詞の屈折は一致しない．その際に，ロシア語において最も指示対象の広い，すなわち最も指示対象が曖昧な 3 人称複数という形態が選ばれる．たとえ言語外事実から脱落する主語が単数の人物だと明らかな場合であってもこの形態を用いるということは，不定人称文において，3 人称複数という形態が，主語以外の要素の話題化，動詞の焦点化という機能を反映しているということが示唆される．これについては，引き続き，今後の研究課題として検討が必要であるが，このような分析は，情報構造の観点から考察するからこそ得られるものである．その点においても，先行研究を情報構造の観点から捉え直した本分析の方が先行研究よりも優れていると言えるだろう．

また，「不定人称文は動詞の焦点化という情報構造的特徴を持つ」という本稿の仮説にとって，(2)は明らかに問題となる．(2)では，文末に生起する要素は動詞ではなく直接目的語 *knigu* であるため，文末焦点の規則に従えば，*knigu* が焦点を担うことになり，動詞は焦点を担えない．この点については，「動詞の焦点化」から，「動詞以外の要素の話題化」とすることで間接的に問題を回避することは可能かもしれないが，これは根本的な解決とは言えまい．このような問題については，(i) (2)のような例では，*knigu* をかき混ぜる代わりに *mnje* を元位置に残すことも原理的に可能であること，(ii) *knigu* と *mnje* の双方を文頭に移動させること事例も，数は少ないが見られること，そして(iii) このような二重目的語構文の統語構造という 3 つを詳細に検討し，今後の研究の中で解決を目指したい．

略語

1	1 人称	GEN	生格	PST	過去
3	3 人称	NOM	主格	REL	関係代名詞
ACC	対格	PL	複数	SG	単数
DAT	与格	PRS	現在		

参照文献

Bailyn, J.F. 2003. “Does Russian Scrambling Exist?” In S. Karimi (ed.) *Word Order and Scrambling.* Malden, Mass. Blackwell Publishing. 156-176.

Burzio, L. 1981. *Intrasitive Verbs and Italian Auxiliaries.* Ph.D. dissertation, Massachusetts Institute of Technology, Dept. of Linguistics and Philosophy.

Comrie, B. 1981. *Language Universals and Linguistic Typology.* Chicago: The University of Chicago Press.

Erteschik-Shir, N. 2007. *Information Structure: The Syntax-Discourse Interface.* Oxford: Oxford University Press.

Gelderen, V.van. 2003. *Scrambling Unscrambled.* Ph.D. dissertation, University of Leiden.

Lambrecht, K. 1994. *Cambridge Studies in linguistics. Information Structure Form*: Topics, Focus, and the Mental Representations of Discourse Referents. Cambridge University Press.

村越 律子. 2018.「日本語とロシア語の受身文の対照研究」『ロシア語ロシア文学研究』50, 37-58.

Plungjan, V. A. 2011. *Vvedenie v Grammatičeskuju Semantiku: Grammatičeskie Značenija I Grammatičeskie Sistemy Jazykov Mira.* Moskva: PGGU.

Shibatani M. 1985. “Passive and Related Constructions: A prototype Analysis.” *Language* 61, (4), 821-848.

Xrakovskij, V. S. 1981. Diateza i Referentnost′ //Otv.red. V. S. Xrakovskij./ *Zalogovye Konstrukcii v Raznostrukturnyx Jazykax.* 5-38. Leningrad: Nauka.

Xrakovskij, V. S. 2004. Koncepcija Diatez i Zalogov (Isxodnye Gipotezy — Ispytanie Vremenem) // *40 let Sankt-Peterburgskoj tipologičeskoj škole.* Moskva: Znak. 505-519.